

太宰治

走れメロス 赤い太鼓



2010年
7月10日(土) 16時開演
7月11日(日) 13時開演
会場 一心寺シアター倶楽

朗読劇団
朗読 GEN 第8回定期公演

2010年度 次回公演

12月12日(日)14:00開演
中宮サロン第49回例会

演目未定

チケット/500円

枚方市サンプラザ生涯学習市民センター
視聴覚室

サンプラザ3号館5階 TEL.072-846-5557
京阪枚方市駅、東口改札口を出て右へ徒歩2分

お問い合わせ・ご予約

中宮サロン藤津/TEL&FAX.072-840-3435

朗読GEN秋山/TEL&FAX.0742-48-8688

朗読 GEN に入って

一緒に朗読を学びませんか!

文学を立体的に立ち上げて、人物が動き出したら、面白いでしょう。演劇と違うのは脚本化せず、原作を大切に舞台化すること。文学好きなあなた、一緒に舞台を創りませんか。スタッフとして活動して下さる方も大歓迎です。稽古見学に、一度ぜひお越し下さい。お待ちしております。

お問い合わせは……

秋山 (TEL&FAX 0742-48-8688)

■お問い合わせ、チケットのご予約は

FAX 専用 06-6691-0569 (清水)

ホームページ/朗読GEN

<http://book.geocities.jp/roudokugekidangen/2008/>

メール/roudokugen@yahoo.co.jp

電話/0742-48-8688 (秋山)まで

太宰治の生涯

幼年期



1909年(明治42)、6月19日、青森県北津軽郡金木村(現・五所河原市)に父・津島源右衛門、母・たねの第十子、六男として生まれた。戸籍名は津島修治。親族、使用人をあわせると、三十数人の大所帯であった。曾祖父の時代に財を成し、明治三十年頃には250町歩の田畑を持つ大地主となり合資銀行金木銀行を設立。父、源右衛門は31歳で青森県議会議員に当選。明治37年には県内多額納税者番付第4位となる。07年自宅を新築(現在の斜陽館)、600坪の宅地は高さ4分の赤煉瓦塀が巡らされてあった。建築費は四万円。修治はこの邸宅で生まれた最初の子供であった。明治45年父は衆議院議員に当選。母、たねは多忙を極め、叔母に育てられた。3歳の時、小作人の娘タケが女中として住み込み、5年間子守を努めた。後年太宰は名作『津軽』でタケとの再会を感動的に描いている。尋常小学校では、「金木の殿様の若様」として周囲に一目も二目もおかれる存在であった。五年の時、担任のアンケートに答えて将来の希望を「文学」と記す。【この家系で人からうしろ指を差されるような悪行を演じたのは私一人であった。】「苦悩の年間」1946】1923年(大正12)、貴族院議員となつ

ていた父・源右衛門が52歳の若さで急死。青森中学に入学し、井伏鱒二や芥川龍之介に傾倒し、「校友会誌」に「最後の太閤」を発表。作家になることを願望し、旺盛な創作活動を行っていた。

青年期



1927年官立弘前高校に入学。青森市で開かれた文芸講演会で、芥川龍之介の話聴き大いに感動するが、2ヶ月後芥川は自殺。太宰は大きな衝撃を受ける。翌年、同人雑誌「細胞文芸」を創刊。その頃、芸妓の紅子、本名・小山初代と知り合う。

1929年(昭和4)、カルチモンを飲んで、昏睡状態となり、周囲を驚愕させる。様々な原因が推察されたが、結局神経衰弱による睡眠薬の飲みすぎとして学校に届けられた。1930年(昭和5)、念願の東大文学部仏蘭西文学科に入学。豊多摩郡の下宿には弘前高校の左翼学生が出入りするようになり、極左的行動に身を投じていく。同年六月初代を東京へ呼び寄せたことが長兄の文治に知られ、分家、除籍を条件に初代との結婚話が進む中、鎌倉で太宰は心中を図る。出会って1週間の銀座のカフェーの女給田辺あつみが相手であった。

女性は亡くなり「自殺補助罪」に問われるも長兄の力添えて起訴猶予となる。その後も左翼活動を続けるが文治が送金を停止し、青森警察署に自首。共産党活動と縁を切ることを誓約する。

1935年(昭和10)、鎌倉山で縊死をはかるが失敗。この後麻薬性鎮痛剤のバビナルの中毒となる。東京武蔵野病院に入院させられ夜は鉄格子のはまった閉鎖病室に収容された。この頃、初代が小館善四郎と通ちを犯し、激しいショックを受ける。1937年初代と心中を図るが未遂となる。

再生の日々の3人の女性



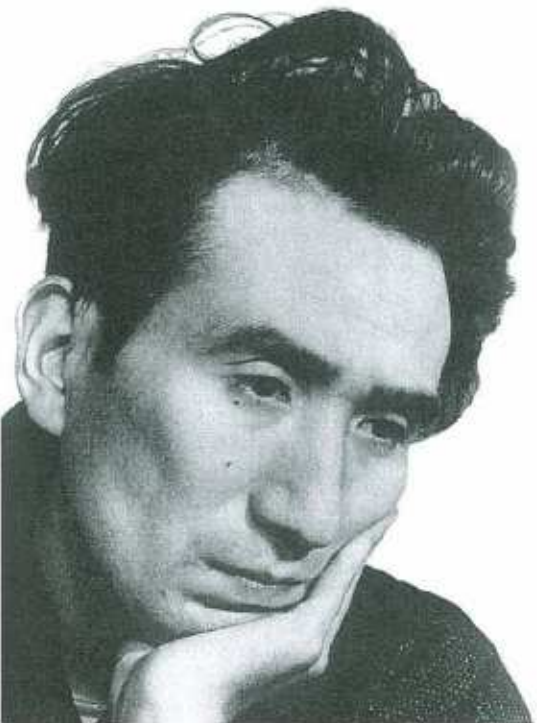
初代と離別。井伏鱒二の媒酌で、高等女学校で地理と、歴史を教えていた石原美知子と結婚する。

「会わぬ先からだ彼の天分に幻惑されていた」(津島美知子「回想の太宰治」と記したように、ひたすら太宰の才能を信じ、愛し続けた女性を得て、人生をやり直そうと決意した彼は、落ち着いて創作に励んだ。長女・園子、長男・正樹、次女・里子をもうける。

1947年11月、「斜陽」のモデル太田静子との間に治子が誕生、認知している。しかし5月に静子が上京したとき太宰は静子と会うことを回避、2度と会うことはなかった。次女里子が生まれた3月に三鷹駅前うどん屋で

山崎富栄と初めて会う。死別した兄と同じ弘前高校出身と聞き、友人に紹介してもらったのだ。日本大学付属第1外語学院で英会話を学び、英語に堪能であったようだが、文学者仲間には「とるに足りない女」などと書かれ、不評のようだ。坂口安吾も太宰は富栄に惚れていなかったと書いている。この頃、作品が映画化、ラジオドラマ化の話もあり、多忙を極める中、肺浸潤は更に悪化、精神的にも追い詰められるようになっていた。

1948年、40歳の誕生日の直前、6月13日玉川上水に富栄とともに入水自殺。後年、公表された遺書に美知子にあてて「誰よりもお前を愛していました」とあった。



解説 赤い太鼓

解説 走れメロス

『新訳諸国噺』の中の1編。これは西鶴の「本朝校陰比事」という元禄2年正月に刊行された短編小説集の中の「太鼓の中はしらぬが因果」という話を下敷きにした作品。太宰はこの方法を大変得意にしてきた。「自分で小説のストーリーをつくるより、既にあるストーリーの中で、その作中人物の心理や情景をさまざまに解釈し、その中に自己を仮託して空想をたくましくするのが好きだったらしい。その意味では太宰治はストーリーテラー的な小説家と言うよりも、そのことを分析し、解釈する批評家的素質の方が強かったと言えることができる……」



その点、芥川龍之介などの知性的作家の系譜につながる」と奥野健男氏は書く。太宰は西鶴を「世界で一番偉い作家である。メリメ、モオパッサンの諸秀才も遠く及ばぬ。」と絶賛している。戦争下の日本の偽善に満ちた風潮の中で欲得や義理をめぐる人間のおかしさ、哀しさ、人間の裸の姿を鋭く描いた西鶴の世界への傾倒自体が痛烈な風刺となっていた。

自己を徹底的に破壊しようとする内的真実に殉じた前期の生き方を改め、現世の生き方に方向を転じた中期の作品である。昭和14年に師、井伏鱒二の紹介で結婚し、落ち着いた生活を始め、職業作家として生きていく決意を固める。そして古典、フォークロア（民間伝承）に取材した作品が多くなる。これもその1つで昭和15年の「新潮」5月号に発表された。最近の研究では小栗孝則訳「新編シラー詩抄」の「人質」を元にしていてのこと。人間の信頼と友情の美しさ、圧政への反抗と正義とが、簡潔な力強い文体で表現されている。小中高の教科書に長く掲載されて、最も広く知られた名作である。人間の持つ暗さ、不安の中から、迷いや苦しみに耐えてはじめて息吹いた明るさ、信頼を、現代的な心理や含差をにじませて描き、奥行きのある深い感動を読むものに与えている。

あらすじ

赤い太鼓

西陣の織物職人、徳兵衛は人のいいのが取り柄の律儀者。女房と連れ添って19年、根っからの貧乏性で借金がかさみ、今年の暮れはとうとう夜逃げを考える有様。事情を聞いた近所の顔役達、は、永年のよしみもあり、それぞれ十両を出し合せて百両を立て、徳兵衛を救おうとやってくるが……



走れメロス

村の牧人、メロスは妹の結婚支度を整えるため、十里離れたシラクスの街にやってくる。人々は皆一様に暗い顔で、人目を避けるように歩いている。不審に思ったメロスは1人の老翁に事情を尋ね、王の暴虐に激怒する。王城に向かった彼はたちまち捕らえられる。命を惜しまぬメロスであったが、妹を結婚させたいと王に3日の猶予を申し出る。人を信じられぬ王は心の中でほくそ笑み、「ちよつと遅れて来い。おまえの罪は永遠に許してやろうぞ。」と言い放つ。メロスの身代わりとして捕らえられた無二の親友、セリヌンティウスを残して、村へ帰った後、メロスは再びシラクスをめざして出発するが……

1909(明42)	青森県北津軽郡金木村に生まれる
1920(大9)	綴り方では既成の物語を脚色して独自の物語を作る
1922(大11)	6年間全甲主席で金木第一尋常小学校を卒業
1927(昭2)	官立弘前高校に入学。芥川の自殺に衝撃を受ける
1928(昭3)	同人雑誌「細泡文芸」副刊するも第4号で廃刊
1930(昭5)	東京帝国大学佛文科に入学 5月井伏鱒二に会い、以後生涯の師と仰ぐ
1932(昭7)	左翼運動からの離脱を誓約
1933(昭8)	同人誌に「魚腹記」が掲載
1934(昭9)	「猿面冠者」「ロマネスク」
1935(昭10)	パピナル中毒となる 「道化の華」「ダス・ゲマイネ」
1936(昭11)	パピナル中毒により入院「晩年」
1937(昭12)	初代と心中未遂。「20世紀旗手」
1939(昭14)	石原美知子と結婚。「掌聲と魔笛」「富嶽百景」三鷹下連雀に転居
1940(昭15)	「走れメロス」「駆け込み訴え」「女の決闘」「るまん燈籠」
1941(昭16)	長女園子誕生。太田静子が訪問「新ハムレット」
1943(昭18)	母たねの一周忌に妻子と青森へ「右大臣実朝」
1944(昭19)	越野タケに再会。長男正樹誕生「新訳諸国噺」
1945(昭20)	甲府に疎開。全焼で金木へ疎開「お伽草子」「バンドラの匣」
1946(昭21)	坂口安吾、織田作之助とつき合い始まる。無糖派と称す 初の戯曲「冬の火花」
1947(昭22)	3月次女里子誕生。11月太田治子誕生。「トカトントン」「ヴィヨンの妻」「斜陽」
1948(昭23)	山崎富栄と玉川上水に入水自殺する。「人間失格」「桜桃」「如是我聞」

【参考文献】

- 文春文庫／斜 陽
- 新潮文庫／走れメロス
- ＊ /お伽草紙
- 平凡社／別冊太陽
- 明治書院／決定版対訳西鶴全集11
- ポプラ社／「百年小説」の楽しみ
- 河出書房新社／新文芸読本 太宰治
- 東京堂出版／近代作家エピソード辞典
- 彩園社／肉声 太宰治

一口メロ
井原 西鶴(1642~1693)
大坂の裕福な町家に生まれる。若くして家業を譲り、俳諧に親しむ。1684年、住吉神社前で一昼夜に2万3500句を詠む。その後浮世草子作者として活躍。「好色一代男」「日本永代蔵」「世間胸算用」「西鶴諸国拙」「赤い太鼓」中の10両は今のお金に換算すると約10万円にあたる。